

1. 開会

2. 出席者紹介

3. 議事

- 1) 令和4年度万国津梁会議について
- 2) プラスチック問題に関する取組の周知啓発
- 3) プラスチック問題に関する内外との連携調整等
- 4) 提言（素案）について

浅利委員長： 全体像のちょっと大きな話から、特に情報発信関係のかなり細かな話まで、粒度がいろいろでしたが、ぜひ皆さんの方からご意見をいただければと思います。

まず個人的には、全体の話もそうなんですけれども、これから周知するにあたって、では何を周知するのかということで、われわれの議論がうまく伝わるようにということで、今回の資料でいきますと、別添資料2の付属資料ということで、普及啓発資料案というものを作成、用意いただきました。こちらも、これで私たちの意図が伝わって、それに合致するようなキャッチフレーズが集まってくるのか、アイデアをいただけるのかというような視点からも見ていただけるとすごくありがたいなと思っております。

まず現地の方で事務局の方でご指名いただいでご発言いただけたらと思います。

常盤委員： 提言のタイトルが「プラスチック問題」となっていますね。いまさらですが、「プラスチック問題」というのは非常に大きなタイトルだと思います。ただ、プラスチックごみの回収・処理問題とか、海洋ごみ問題だけじゃなくて、石油から大量に生産されるプラスチック素材の多くが自然界の循環に入らないことにも注目する必要があります。

プラスチックを開発・生産する研究者や事業者には、プラスチックの機能向上の他にも、「つくる責任」を持って、温室効果ガス削減等の努力が求められます。

タイトルが例えば「プラスチックごみ問題」だったら、この会議で討議してきた内容でよいのかも知れません。しかし、「プラスチック問題」だとプラスチックを製造する側の取り組みについても、もう少し討議が必要なのではと思います。

浅利委員長： はい、ありがとうございます。後でちょっとまとめて事務局なり、また、これを受けたご意見もいただけたらと思っておりますが、ほかにも現時点でもございましたら、ほかの論点、今の論点に対するご意見でも結構ですけれども。

原田委員： 今のご意見というのが、私はご意見の方が理解できなかったんですけれども、つまりご指摘の点というのは、「プラスチックごみ問題」のように、例えばですけど、限定した方がいいのではないかとのご意見ですかね。常盤委員にここでご質問、いいですか。

常盤委員： それに近いです。リサイクルも含めてですけれども、プラスチックのごみ問題があるからどうしましょうかというような、かなり限定されたプラスチック問題ですね。新しいプラスチックをつくろうという側から見たら、だいぶ違うイメージのプラスチック問題だなというふうに見えます。

原田委員： むしろ私は「プラスチック問題」でいいんじゃないかなと。そういうご趣旨でしたら。といいますのが、使用とか廃棄に係る話だけではなくて、流通であったり、あるいは今ご指摘のような新しい素材の普及であったり、そういったこと全部の政策を総動員しなければいけない話だと思いますので、むしろこの幅を持ったタイトルの方がいいんじゃないかなという気がしました。

浅利委員長： はい、ありがとうございます。重要な論点かと思っておりますので、もし今のこの点に関してご意見がありましたら。おそらく今日の議論自体が、かなり今、情報発信とかの細かな話になっているところもあるので、後半で提言全体の話も出てまいります、現段階でもし何かこの点でご意見がございましたら。

そもそも、この万国津梁会議自体が「プラスチック問題に関する万国津梁会議」というところで答申していただいておりますので、私も原田先生と同じ認識でおりました。ただ、今ここまでプラスチックが世界課題になっている背景としては、海ごみを含めた資源循環のところから来ているというのは事実ですけれども、プラスチックという素材のあり方そのものから考えるという認識で私自身はおりますが、何かほかにももしご意見がございましたらお願いしたいと思っておりますけれども。

村上委員： この配布用チラシの原案のプラスチック問題に関する文章を今読み直してみました。議論されていたことがコンパクトに書かれていますが、もう一つ、地球温暖化の観点からも、燃やすプラスチックを減らさないといけないという視点があるとよいと思います。

それに関連してですが、このおもて面の一番下、沖縄におけるプラスチック問題解決に向けた取組のところに、ワンウェイの大幅削減というのが記載されていないのがとても気になっています。提言の内容の目次のところを見直してみると、文章の中には入っているんだけど、タイトルに出てきていない。だからここに来ていないのかなというようなことも感じております。

プラスチック問題の全体像が書かれてあって、そこに視点が足りないというのが常盤委員のご指摘で、私も今温暖化を入れてもらいたいということを申し上げました。そして、対策のところではリユースの視点をもう少し強調したいというのがこれを拝見したときの私の印象です。

浅利委員長： ありがとうございます。温暖化とか化石資源といった視点にも目を向けていきましょうという話と、3R (Reduce、Reuse、Recycle) の優先順位もあらためて出るようなかたちも私も望ましいのかなと思います。ありがとうございます。

ちょっと話題が広がりがつありますので、もしよろしければほかの視点からでも結構で

すので、ご意見があればぜひお願いいたします。

久鍋委員： 県の方でこうやって取りまとめをしていただいて、また、スピード感を持ってこのスケジュール感を立てていただいたことについては大変ありがたく思います。たぶん大変だと思いますけれども、これからもぜひ頑張っていたきたい。

何点かだけご質問があります。提言の方はまた別として、目的は、県民もしくは学生やいろんな方への周知、これをいかに広げていくかということでのブランディングであり、キャッチコピーだと思っています。ここでちょっと確認をしたいのは、このキャッチコピーというのは、今回動画とかそういった募集は入れないんでしょうか。たぶん今、若い世代に早く周知をさせようとするのであれば、キャッチコピーではそこまで、その先のことが強くないと、なかなか広がらないんじゃないかなというのは本音で思っています。ぜひ募集の中に動画、または、その動画を使った告知ができるような取組ができれば参加者も多く増えるのではないかなと思っています。

それともう1点は、そうは言いながら、私たちも企業でやっぱり困るんですけども、Google フォームを使った募集をしていくと、どうしてもそれができないということが出てきてしまうのも本音です。県民全員に、もしくは告知をしていくのであれば、その補足方法もちょっと入れていただければ、参加する意識の方も増えていくんじゃないかなと思っていますので、ぜひ検討していただきたいと思います。よろしく申し上げます。

浅利委員長： ありがとうございます。ほか、ご意見をいただいてから、まとめて事務局の方から今お答えできる部分はお答えいただき、ちょっと時間が欲しいというところはそういう対応でいただきたいと思います。現地から何かご質問、ご意見はいかがでしょうか。

赤嶺副委員長： 私も周知の件についてですが、キャッチフレーズだけではなくて、今久鍋委員からもありましたけれども、動画、ポスターみたいなものなどキャッチフレーズをどこで使うのか。

例えば企業の方に周知させるためにはポスターみたいなものがあっていいのかなと思いまして、キャッチフレーズと併せて、絵とか写真とか、そういったものも取り入れて配布していくとなどやっていたらいいのかなと思います。周知させるという意味では。

もう一つ、その周知方法の中で環境フェアでの周知という話もありましたが、そこにはもともと環境に意識が高い方々しか来られないのかなと思いまして、その方々に周知されても、あまり意識を高める効果として、なくはないですが少し弱いのかなと思います。

そういったこともやりながら、例えばスポーツのイベントだったり、お祭り、沖縄だと結構あちこちでマラソン大会みたいなものがあったりしますし、そういったところで使われるような容器をちょっと変えてみるとか、もともと意識のない方々にも参画してもらうような仕組みをやっていくと意識は高まってくるのかなと思います。

今、実際プラスチックのフォークやナイフが木に置き換わったりしていて、「世の中、本当に変わってきたんだな」というのが意識のなかった方々にも今感じさせるような機会がつくられていますので。それを沖縄の中でというふうに考えるのであれば、これからコロナ

も明けて、お祭りとか、いろんなイベントごとに、この環境フェアのイベントではなくて、どこかで、例えば産業まつり、那覇まつりなどにおいても、こういったものを使っていたできるように主催者側に要請していくとかですね。それで広げるという方法もありなのかなと思います。意見です。

浅利委員長： ありがとうございます。ほかにも何か周知啓発方法に関してアイデアとかご意見のある方がおられましたら。

清野委員： はい、初めてリアルで参加させていただきます。九州大学の清野です。これはたぶんですが、県外の人間から思う沖縄と、沖縄に住んでいらっしゃる方が思う沖縄で少し違いがあったら申し訳ないんですけども、やっぱり沖縄らしさということとかをもっと見える化するような資料づくりとか、言葉が必要なんじゃないかなと思います。

それは、自分たちもほかのところから来るものを拾っているし、自分たちのところが出したものがすぐにまた海に出て漂ってってしまうという、そういう特性の中で私たちはこれを考えましたというような、沖縄の地理的、海洋学的というか、そこをもっと最初に出して、だからプラスチックの循環ということを考えるようになりましたという、少し論理というか、そこを示していただくといいのではないかと思います。

例えば、これが国内外の島しょ地域の先導的な役割をとというふうなことだと思いますので、なおさらそういう視点で入れていただくといいと思います。だから、何回か申し上げているように、自分たちも拾っているし、自分たちの川の距離が短いから、出したらすぐに、ひと雨でどんどん外洋に出ちゃうみたいな、そういうことなので自分も気を付けるし、皆さんも気を付けましょうという、その内外に対する呼び掛けのところかなと思います。

そうすると、プラスチック問題のこの別添の資料の2ですけども、海中の写真がありますね。4枚中、海中の写真が3枚あって、サンゴに絡まるごみというのが2枚ありますが、これがもうちょっと海岸の奥の方のところ、海岸部に入ってしまったとか、あるいはもうちょっと人工ビーチみたいな都市域に近いような海岸のところ、観光に使うとか市民の人が遊ぶようなところにもどっさり来ってしまうとか、そういうより身近な写真を入れるか、もしくは取り換えるなどしてもいいのかなと思っております。

浅利委員長： ありがとうございます。具体的なお指摘ですし、すごく重要だと思います。

原田委員： 先ほどの、例えば映像での募集というもの、これも私は非常に大事かなと思いますし、亀岡市での経験を少しご紹介させていただきますと、亀岡でアーティストの皆さんと一緒にごみ問題をアートの方も借りて広めていくということをしました。アーティストの皆さんからの本当に今から思うと大事な指摘だったんですが、「五感に訴えよう」と。

例えばこういうキャッチフレーズとかというのは目で見る情報ですが、あるいは駅なんかで自動音声のアナウンスがありますよね。そういうところで音声でも伝えていくとか、もちろん映像もというふうに、ありとあらゆる方法を使うということが非常に大事で。そうなってくると、若い皆さんであったり、アーティストの皆さんであったり、従来環境問題に直接関わっていなかった皆さんの力も借りざるを得ないし、またそれによって新しい皆さん

を巻き込んでいくこともできますので、非常に効果的じゃないかなと。第1弾で出るキャッチフレーズ、これはこれでいいと思うんですが、今後そういうさまざまな展開を考慮されるとよろしいかなと思います。

それと先ほど、お祭りとかスポーツイベントとか、浅利先生も京都の祇園祭とかをよくご存じだと思いますけれども、リユース食器などをそういうところで積極的に推進していく。あるいは、そういうものをお使いいただかないようなものは、もう行政として後援を出さないですよというようなことを後援条件の中の一つに入れていくということを今大阪府などでは議論したりもしておりますので、亀岡市でもそういうふうになつていきますけれども。

行政は使える権限というのが意外とあるんですよ。後援申請というのは山のように来ると思うんですけど、では、その後援申請の中にいきなりハードルを高くする必要は必ずしもないと思うんですが、この条件を満たさないといけないというのは今でもありますよね、いろいろ、その中に「環境配慮の取組」というものを入れて、それをなおかつ時間とともに強化していくような、そういうことをしていただいたら、今おっしゃったお祭り、スポーツの取組というのは、例えばスポーツチームの側も何かやりたいと思っていらしたりすると思いますので、効果的に進められるんじゃないかなと思います。

栩野オブザーバー： オブザーバーですけど、恐縮ながらご指名もありますので発言させていただきます。

いろんなご指摘、特にせつかくここまで頑張ってつくっているの、キャッチフレーズ、もしくはメッセージが多様な人に多様な方法で目につくようにというのは大賛成でございます。

私は経済同友会という立場もありますが、観光業界の真ん中にいるので、こういういろんな多様なメッセージの方法、ビジュアルなもの、五感なものがあると、実は県民だけでなく、観光で来られる方にもどんどん露出できるというのがありまして。後で提言のところでも同じようなことが出るかもしれないんですけども、県民自体も観光の人からどう思われるかというのはすごく大事な話なので、県民のみならず外から来る人にもどんどん露出することで機運が高まると思いますし、最終的に提言の中にもあるんですけど、県民が誇りに思うような動きになったらとてもいいなと思います。

浅利委員長： では、また後半にも提言書でもう少し幅広い議論もありますので、そこでも積み残しのことをご発言いただくという前提ですが、たくさん具体的なアイデアもいただきました。事務局サイドから今お答えいただけること、それから少し検討に時間を要するもの、併せてご発言をお願いできますか。

事務局： それでは、周知方法について、動画についてですけども。事業期間内で動画を含めた周知方法を実施できるかについては検討が必要かと思っております。再度事務局側で検討した上で、実施方法や実施時期等については検討した上で正式な回答をさせていただきたいと思っております。

村上委員からありました地球温暖化について提言に入れられないかとか、ワンウェイプ

プラスチックの削減という視点、この辺につきましても、今日貴重な意見をいただきましたので、この中に盛り込めるかどうかを確認したいと思います。

それから、産業まつりやイベントなどでキャッチフレーズを活用していけないかという意見について、これにつきましては、資料3の3ページ目の下の方ですけれども、4番の「キャッチフレーズ等決定後の周知啓発イベント等の開催に向けた検討」ということで今日例示していますが、令和5年度以降の開催を想定しているイベントでの周知活動として、今年度の2回目、3回目の万国津梁会議で検討していきたいと思います。その中でこういったイベントがあるか、先ほど産業まつりなどがありましたので、もうちょっと深掘りしていった調整、検討していきたいと思います。

あと1点、「プラスチック問題」というタイトルについてですが、沖縄県としましては、プラスチック問題ということで、プラスチック素材に着目した取組ということで、幅広く問題解決していこうと進めております。それで各委員の皆さまには、製造事業者から小売事業者、廃棄物処理・リサイクル事業者、消費者目線となる消費生活アドバイザー、そして大学の研究者など、広い分野から委員に就任していただいておりますので、「プラスチックのごみ問題」など限定した問題だけではなく、製造業・新しい素材とか、リサイクルなども含めて、プラスチック問題全般について幅広く議論していただけたらと、そういった趣旨でおりますので、その辺をまたご議論をよろしくお願いいたします。

浅利委員長：では、今折り返しになりましたので、これから提言全体の話にもなります。またこの中でも当然、発信であったり連携の広げ方の議論もあろうかと思っておりますので、そちらでもご意見をいただきたいと思います。私もそっちの方で自分のコメントもさせていただこうと思います。

「3.議事」4)に対する質疑応答

浅利委員長： いくつか論点があると思いますが、まずこういう整理の仕方でよいかという点、特に3ページ目、最後にご説明もありましたけれども、この短期、中期、長期の考え方、場合によっては、これで早いのか遅いのか、短期5年は短期なのか、長期は逆にもっと長期と考える点もあってもいいんじゃないかなど、いろいろお考えがあるでしょうから、そのあたりへのご意見。

あとは、内容的にもこれからまだ提言に向けてブラッシュアップしていきますので、内容として盛り込むべきこと。それから、より多くの人に役に立つようなものという視点で、今回はコラムを入れてはどうかとか、モデルを写真も含めて紹介してはどうかという話がありましたけれども、それ以外の。先ほどの普及と関係するところもあろうかと思いますが、そういう視点も併せてご意見をいただきたいと思います。

久鍋委員： 短期・中期・長期って、ものすごくいい考え方だと思います。一つの目標やゴールを決めて、やればやるほどスピード感や達成度は上がると思いますので。内容についての部分はまだ、さっき委員長からありましたように、修正や状況によって変えないといけないものがたくさんあると思います。

それで、この中で1点だけ私からお願いしたい点がありまして。この循環社会ビジョンの中に、やっぱり沖縄を日本でリードする取組をやりたい。たぶんほとんどの項目は、ほかの県でやったり、ほかの市町村でやったり、海外でやったり、その項目はべつにすぐまねることも簡単ですし、取り組むこともそんなに難しくないと。では、ここの中で沖縄で何を重点に取り組みたいのか。例えばこの後出ていた修学旅行としての沖縄。これをものすごく強く出すのか。例えば教育としての沖縄。本当に循環としての沖縄。どこのターゲットを強く出すかで、たぶん沖縄に住んでいる人がやりやすい状況下というのが出てくると思います。

項目はさきほど読ませてもらう限りものすごく内容が充実していると思いますから、その部分のターゲットをもうちょっと強く出してもらえると、今度私たち現場の企業としてもやりやすいというのも本音ですので、ぜひご協力していただければと思います。

それと、小売関連としてという、今、原料費が上がって、エネルギーが上がって、何が上がって、その上で環境のものをしていけるとなると、ものすごい原材料費を含めた今の状況下になっていることもご理解をください。企業に周知をしてやってくれというのは、協力はいくらでもやりますけれども、今の現時点で、コロナの次にこの原料費の高騰の中で小売物価はかなり厳しい状態になっているということもご理解をいただければと思います。

原田委員： まず、期限を短期・中期・長期、これは期限を定めてというのは非常に大事なことかなと思います。その上で、そこに期限を定めた上での具体的な目標というものが同時になれば、それこそ企業の皆さまも、では、いつまでに何を具体的にやったらいいんだということが、なかなか行動に移すのが難しくなりますので、今この時点では、例えば個別の品目についてというのは定めなくても、例えばレジ袋辞退率といいますか、マイバッグの持

参率を中期的には 100%にするとか、どのタイミングでというのは議論したらいいと思うんですけども、そういうふうな全体の結果としての数値目標を定めておくことが大事なかなと思います。

それから、修学旅行というのが皆さまからもよく、沖縄の特徴ある一つの産業と言っているかなと思いますが、指摘が挙がるんですけども、私の娘も小学校の6年生でして、先日関西の伊勢志摩の方に修学旅行に行くんですけども。亀岡市はご存じのとおり、ここにも事例で挙げていただいています、レジ袋は完全に禁止しています。

それで伊勢志摩に行きますと、向こうはたぶん好意だと思うんですけども、レジ袋有料化の対象外の、例外のバイオマス 25%配合とかのレジ袋を、家族のお土産とかに人数分小分けの袋をばさっと付けてくださるんですよ。それを子どもたちが大変戸惑ってですね。うちの子だけじゃなくて、ほかの子もですが、「こんなことをやっていいの？」と。むしろイメージダウンなんですよ。向こうは善意なんだけれど、受けている方は、先進地域からいくと「何をやっているんだ」という話になる。

これは今後、日本を除く周囲の国々で、今ほとんどが例えばレジ袋を禁止にしたりしているわけですね。そういう中でコロナ後でインバウンドがまた戻ってきたときに、「まだ日本ってレジ袋を配っているの？」と。あるいはホテルに行きますと、今日泊まったホテルで歯ブラシとかを無料でまた置かれていました。遅れているなという印象を持たれかねない。

やはり沖縄県が先進地域となっていくためには、国の規制を1歩2歩進んでやっていくことも必要です、それを個別の企業の努力に委ねていたら、正直に取り組んでくださるところだけがコストが増えることになってしまうんですよ。そうじゃなくて、やはり社会のルールにしていく。それはつまり県の条例などでしっかりと示すことによって、変な言い方ですが、嫌でもやらなければいけない状況をつくることで、逆に先進的に取り組んでくださっている企業は先行した利得を得られるような、そういう仕組みをつくっていかないと、今現状では正直者がばかを見るというようなことになりかねないのかなということを危惧しております。

清野委員：先ほど申し上げた意見と重複するんですが、そのご回答をいただいているので、もう一回言いますと、資料4の3ページのところで、沖縄県が目指すべきプラスチック資源循環社会のビジョンということで青く囲ってあるんですが、ここがまだもうちょっとブレイクダウンというか詳しく書かないと、県民の方に分からないかなという気がします。

つまり島しょ地域の特性や課題というところをもっと大きい字でどこかに書いて、だから沖縄が頑張るんですよというのをPRしないと、今ほかの委員の先生からも出ていたように、どこの自治体でもたぶん一通りのことが書いてあって、沖縄らしさというのが見えにくくないかなと思います。

それで、この提言の文章の構成を見てみると、最初に一般論から入っているんですよ、1ページ目。プラスチック問題についてということでSDGsのゴールとが書いてあるんですけど、そこから一般論から入って、それでやっとなら沖縄についてというのが後に出てくる

という構成になっているかと思えます。

行政の方や研究者などはこれでいいかもしれないんですけど、一般の方は本当に自分たちの生活に関わってくるところなので、沖縄のこういう状況なんですよ、でもその沖縄県民の方がいろいろ頑張ってくださいすることで、これって国内とか世界の人にもいい影響を与えたりとか、逆に世界の方がやっていることが自分たちにも関わっているんですよというように、どこからどこに軸足を置くかというのをもう一回ちょっと考えて構成していただくといいのかなという気がします。

島しょ地域の特性や課題というのが、沖縄県民の方がすでに対象化して理解されていて、わざわざ書く必要がなければいいのかもしれないですけど、たぶんそれはそこまでじゃない場合があると思うんですね。九州自体も大きい島なんですけれど。

そうすると、さっきから申し上げているように、島だからこそ自分が出したものがすぐ外に出ちゃうみたいな話とかを意識して自分たちが頑張ることと、世界につながるということのをかなりしつこく書かないと沖縄らしさというのが出ないんじゃないかなという気がします。ちょっとそこは今日、全体の方針とか視座に関わるところだと思うので、もしも関係する事務局の方からお考えとかがあれば何えればという気がします。

棚野オブザーバー： 原田先生がおっしゃっていたところに関連することを言おうと思っていたので、このタイミングで発言させていただきます。それ以外もちょっと言うんですけど。

この提言の一つに、ぜひこういうのも盛り込んだらいいかなと思ったことが、沖縄県のいろんな行政のほかの動きとの連動性ということを意識したらどうかと思いました。

それで、いくつか例えばで言うんですけど、SDGsアクションプランというものがもう先月発行されたと思うんですが、それで原田先生がおっしゃったいろんな数値目標というのがSDGsアクションプランの中に、特にこの辺はもう出てきているはずなので、これから数値目標を入れていくとしたときに、もうすでにできているSDGsアクションプランも意識していくと、結果としてばらばらにならないし、統一性ができていいと思いますし、県民にとったら同じメッセージになるということもあります。

あと、ホテルとかでアメニティーのプラスチックを減らしましょうという話もあったんですが、実は第6次観光振興計画基本計画というのがあって、この中の数値目標にアメニティーを置かないホテルの割合を何%にするかすでに出ているんですよ。なので、ご指摘は本当にそうだと思いますし、実はほかの行政の部分でも同じことが議論されているので、ぜひ連携するといいかなと思います。まとめて言うと、関連するような沖縄県のほかの行政の数値目標との連携性ということだと思います。これが一つです。

もう一つ、私の別の意見を先に言いますが、久鍋さんがおっしゃったように、この文章はすごくよくできていて、特に県民とか教育とかというところは非常に、僕は専門家じゃないんですけど、専門的な知見がずいぶん入ってとてもいいと思いました。実はちょっと感じているのが、産業界とか事業者が読んだときに、若干わくわくしない感じがあり

ましてですね。事業者にとっての参加したい感がもっと増すようなことが、構成上なのか中身なのか、もうちょっとあった方が、僕は事業者の立場で出ていくので思いました。

それで、17 ページの連携体制の構築のところ、③で「金融セクターとの連携」というのがあって、これは私が発言したものを反映していただいたんですけれども。さっきの話と若干かぶるんですが、県のSDGs推進室の方では今SDGsパートナーという登録制度があるんですけれども、これに加えていわゆる認証制度も検討されていまして、SDGs的な要件を満たせばいろんな優遇ができますみたいな制度はすでに設計されております。そんなところは非常に参考になるかなと思いますし、久鍋さんが同じことをおっしゃったんですが、企業として取り組んだときの「いいこと」というのがもっと全面に出ると、産業界としては連携しやすいと思います。それは優遇制度かもしれないですし、例えば沖縄県の環境部が出す推奨マークかもしれないし、行政上ユニバーサルサービスだからなかなか難しいかもしれないんですけれども、何かのお墨付きが付くだけでも全然違うので、そういうことを検討する価値はあるかと思えます。

同じような流れで、あと「県民に分かりやすいような事業者のわくわく」ということで言うと、沖縄の産業の最も派手な、花のある分野は観光産業なので、観光産業とこのプラスチックごみ問題の提言が明確にタイアップするような、そういうかたちを取るという方針ですよね。具体的な中身はいろいろ考えるとして、もう明確に観光産業とタイアップしますみたいな方針を立てると、これはとても僕らにとっても分かりやすいし、県民、観光客全てに分かりやすいので、そういうような産業界の巻き込み方の戦略か方針か、そういうものも考えたらどうかと思えます。

浅利委員長： はい、ありがとうございます。村上さん、お願いしたいと思えます。

村上委員： ありがとうございます。今委員の皆さま方からのご意見、なるほど思いながら伺っておりました。観光産業とのタイアップは私もすごく沖縄らしくて、しかも、それこそ修学旅行とかの次の誘致にもつながるということで、いいかたちで循環していけるような提言になるといいなと思いました。

提言案に関しましては、先ほどから目標値ということが出ていますけれども、私もそれに関して申し上げたいなと思えます。

その前に清野委員から、沖縄の特性ということでおっしゃっていたところ、たぶんこの「沖縄県の状況」という2ページからのところにきちんと小見出しを出して、「何が特性なのか」という書き方をしていくと分かりやすくなるのではないのでしょうか。

その中で今3ページの最初のパラグラフのところ、廃棄物におけるプラスチックの量ですとか、そういうことが定性的な文章で書いているんですけれども、こちら辺はちゃんとデータを示してはどうでしょうか。先ほどは前回の会議での質問にご回答いただいてありがとうございました。これによると他県との比較で、実は鹿児島県の倍出しているということが分かったのですが、鹿児島県との比較が良いか、国全体の平均との比較が良いかは要検討ですが、グラフなどで分かりやすく見せながら、どこを目指すんだということを示せると

よいのではないかと思いました。

それから、資源価格が高騰していてしんどい状況というのはよく分かりますし、電気代なども高くなってきているので大変ですけれども、だからこそ今資源の使用量を減らすというメッセージも出せるのではないかと考えていますので、そういう側面もしっかり示していけたらと思います。

浅利委員長： ありがとうございます。重要なお指摘を多くいただきました。

特に私からも重ねて申し上げるとしますと、数値目標も非常に、入れることができるならより望ましいとは思いますが。全てでなくてもいいと思うんですけれども。そう考えますと、今、短期、中期、長期ということで、いつから着手するかということ聞いていただいていますけれども、むしろいつまでに達成するかというふうに考える方が望ましいのかなとは思ったりしております。できる、できないも含めてご検討いただけたらいいのかなということ。

あと全体、総体的に沖縄県としてどこに注力するか、どういうメッセージを強く発信していくか。キャッチフレーズの中から見だしていきたいというのはあるかもしれませんが、やはり今この議論として「どこを大事にするか」というところはあらためてしっかりと打ち出す必要があるのかなと。そのヒントは委員の皆さまからたくさんいただいているのかなと思いますけれども、そのあたりも大きなポイントかと感じております。

いったん事務局の方からご回答いただけるものを、かなりたくさん論点をいただいていますので、できるだけ丁寧に回答いただきたいですし、またこの後たぶん議事録等を確認して今回の会議の冒頭のように個別対応の応答もしていただけるとは思うんですけれども、この場でお返事いただける分に関してはお願いできますでしょうか。

事務局： 今日は貴重なご意見をありがとうございました。今後の参考といたします。

まず、久鍋委員からありました、3ページ目のビジョンについて、何を重点的に取り組みたいのかとか、ターゲットを絞った方がいいのではないかとということにつきましては、私たちも、この会議は去年3回行い、2点ビジョンとして挙げておりました、これでいいのかというのは県庁内でも話がありました。今回ターゲットを絞った方がいいのではないかとのご意見がありましたので、今後検討することとします。これにつきましては清野委員からも、ビジョンをもっと詳しく、沖縄県、島しょ地域らしいものを入れてみたらどうかということがありましたので、それも含めて考えてみたいと思います。

そして、この文章の構成につきまして、冒頭部分の「はじめに」について、一般的なものから始まっていますが、やはり行政の方では文章の作り方としてはこういったものがオーソドックスですが、今回こういう始まり方はどうなのかとご意見、沖縄の特性をもっと重視することなどのご意見がありましたので、それも含めて次回の会議において修正案を提示しますのでご意見をいただけたらと思います。例えば3ページ目「沖縄県が目指すべきビジョン」ですけれども、これを最初に持ってくるパターンやそういった方がいいのかなど、ご意見をいただければと思います。また、このビジョンにつきましては、島しょ地域の特性

についてもっと詳しく書くなど、今後提示していきたいと思います。

短期、中期、長期の目標につきましては、案として仮に入れていますが、開始年度としまして5年後、10年後、15年後としています。数値目標につきましては、事務局内でも考えてみましたが数値化が難しく、取りあえず今こういったかたちで開始年を入れてみました。これにつきましては、栩野さんから沖縄県のほかの部署の計画、SDGsアクションプランや第6次振興計画のホテル等のアメニティー削減目標の数値などを参考にしてはどうかとご意見がありましたので、今後検討してみたいと思います。これらの数値について確認して提言に入れられるか、もう一度検討してみます。

それから、事業者が参加したいわくわく感などについても、難しいですがもう一度考えてみたいと思います。

沖縄県の状況について、村上委員の方から沖縄県の特性を特出しして記載してはどうかという貴重なご意見もありましたので、沖縄県の状況をひとくくりにするのではなく、分かりやすく、廃棄物処理の状況とか、それも視覚的に見えるようなかたちで表を入れるなど検討していきたいと思います。

浅利委員長からありました数値目標について、今、短期、中期、長期とそれぞれ開始する年度を入れておりますが、それを目標年度、目標数値など「いつまでにどうした方がいい」という目標を定めて書いた方がいいのではというご意見がありましたので、これにつきましてもちょっと難しいですが、先ほどのSDGsアクションプラン、第6次振興計画などの沖縄県の他部署の計画に数値目標などあれば、それを参考にしていきたいと思います。開始する時期、目標年度などについても一度、検討し次回示していきたいと思います。

浅利委員長： はい。委員の方から、ちょっとこの点だけはどうしても事務局のご意見や回答、念押ししておきたいことなどがございましたら、ご遠慮なくお願いしたいと思いますが、いかがでしょうか。

原田委員： 2点ございます。まず、さっき言い忘れていたんですが、素案の1ページのところにSDGsのロゴを掲載いただいているんですけど、やはり17番のパートナーシップは欠かせないんじゃないかと。県だけでとか、企業だけでとか、市民だけでというのは不可能ですので、皆さんと一緒に取り組んでいくという意味で17番が欠かせないと思いますので申し添えます。

それから、先ほど私から申し上げた数値目標の件ですけれども、今回これは提言ですので、具体的な行政の計画をつくるわけではないと思いますので、さまざまな計画との整合性、なにも既存の計画に合わせるだけじゃなくて、もちろんそれを前倒しして行うということもあっていいかと思うんですが、今後県でプラスチックごみ削減に関する何か具体的な実施計画のようなもの、あるいは基本計画のようなものをおつくりになるのであれば、そこで数値目標、年限を切った数値目標を掲げてもいいのかなと。

ですので、逆に言えば、そういう具体的な計画をつくりましょうということを強いメッセージとして打ち出せば、ちょっと自分で言うておきながら何ですが、今のご回答を伺ってい

て思いましたので、参考にしていただければと思います。

浅利委員長： ありがとうございます。一方で、棚野さんが言っていたように、ほかの関連計画であったり、あと市町村がお持ちのものもあるかもしれませんし、国自体も定めていますので、大きな方向性として提言できる部分はやってもいいのかなと思います。一度またご検討いただけたらと思います。ありがとうございます。

事務局からも、今の点等に関しまして何か追加でご意見があればと思いますが、大丈夫ですか。ほかの皆さんも、ほか全体を通じてでも結構ですし、また、個別のコラム情報であったりは、たぶん皆さまからもご提供をお願いするものがあるのかなと思っておりますが。

清野委員： 経済界の方々のご協力は本当に重要だと思いますので、今日いろいろご意見をいただいたので、一つご提案としては、認証制度ということでこれを機会におつくりになって、県民の方にも観光客にも見えるようなかたちで、海ごみの、海のためのプラ削減の会社さんやプロジェクトとか、そういうバッジというか、シールというか、そういうものがあるといいのかなと思います。

たぶん今、若い人たちは、どうせ買うならそういうものが興味深くて買ってみるとか、宿を選ぶときに、同じ宿だったらそういうことを頑張っておられるところに興味があったりということもあるので、コスト削減とか、ほかのコストが掛かる中でいろいろ苦労されているということもあらためて伺いましたので、インセンティブになるようなものを入れていただけたらと思います。

今はたぶん観光のいろんなネットのサイトとかだと、いろんな評価項目とかがあったりする中で、何とかワードとか付帯情報が付いているものなどもあるので、その中に入れてもらえれば、そんなに新たに何かサイトをつくるとかじゃなくてもいいと思いますので、ぜひ広めていただけたらと思います。

村上委員： 最初に申し上げ忘れていた標語の公募について、協力していただく対象としてアイデアが他の委員からも出ていたかと思うんですけども、例えばショッピングモールや空港にポスターを貼ってその前に投票箱を置くみたいなかたちにすると、アナログじゃないとアクセスできない方からの声も集められるし、島の外から来た方々にも「今沖縄はこんなことに取り組んでいるんだ」ということを知ってもらえる機会にもなって、よいのではないかなと思いました。

浅利委員長： ありがとうございます。ほかもいかがでしょうか。

ちょっと私からも一つ。先週、久しぶりにヨーロッパに海外出張に行ってきたんですけど、ドイツだったんですけども、行きの飛行機がルフトハンザドイツで、帰りがANAだったんですけど、まず行きしのフライトでは、ほとんどプラはなかったです。ブランケット、包むものにしても、食器類にしても、コップにしても、プラはゼロでした。が、帰りは想像のとおりということで、全部持って帰ってきましたけれど、すごい量でした。

あと現地の方も、シングルユースプラスチックの規制が2019年から始まって、2年間かけて各国に落とし込むということで、今各国に落とし込んで半年というところだったんで

すけれども、やはりドイツでの学会でも、宿泊先でもプラはほとんど、ほぼゼロに近い状況でしたので、日本に帰ってきてすごくショックを受けていますし、スーパーももともとが裸売りの文化がずっと残っているということもあると思うんですけれども、圧倒的に量が少なかったです。

そういう意味では本当に真剣に、観光ということと併せて、その方が豊かというか、プラスチックがある方が気持ち悪いというぐらいまでになっているところもあって、ここはコンビニさんとかいろんな業界の方がおられますので、もちろんゼロにというのは難しいとしても、ずいぶん世界の方ではそういう動きが進んでいるということも念頭に置いて、うまく使い分けていく必要があるのかなということは痛切に感じてきたところです。

では、今後の作業ですね。提言の方の見直しも、かなり力技といいますか、いろいろやっていただくというか、われわれと一緒にやらないといけないんですけれども、特にキャッチフレーズ募集とか、そのあたりが先行的に動く必要があると思いますので、そのキャッチフレーズ募集のためのペラいちを今日ご紹介いただいていたけれども、いったんこれに今日の皆さんのご意見で、本当に沖縄らしさ、沖縄がどこを重視しているのかということであったり、自分事として捉えて、若い方々含めて考えていただけるような、そういうものにつながるペラの完成をまず先にやっていただいて、委員の皆さんとも共有していただいて見ていただくのがいいのかなと個人的には考えていますので、そちらにまずしっかりエッセンスを盛り込んだ頭の整理も行うということで進めていただいているかなと感じております。

あと、今年度からすでに、このキャッチフレーズもそうですけれども、いろんな取組が広がっていくかと思っておりますので、ぜひそういうところも何か動きがあるときはわれわれにも情報共有をいただけたらなと思ったりもしております。また、今日この後 10 分ぐらいありますので、もしよろしければ各委員の方々からも今年度はこういう活動を予定していますということがあればご紹介いただけたらと思っておりますが、私もちょうど残念ながら現地に行けなかったんですけれど、ちょうど東大から伊藤さんが来ていただいて、代わりに現地に参加いただいておりますが、沖縄をフィールドにして研究、調査、それから特に教育プログラムの開発みたいなところもやっていきたいなと思っていたり。

あと、今私たちはこの万国津梁会議の場で議論させていただいておりますけれども、県内にこういう取組活動をしているいろいろなプレーヤーがおられると思っておりますので、そのプラットフォームづくりにも関与できたらなと考えたりもしております。もちろん現地の方が主役ですけれども、そこのお手伝いに入ることで輪が強くなるならよりいいなと思っておりますので、またそのあたりも相談に乗っていただけたらと思っております。

あと残り 10 分くらいなので、各委員の皆さまから今年度の活動に向けて、ご自信の紹介も含めて 1、2 分でいただけたらと思っております。まずは現地で回していただいてもよろしいですか。また会議に対するご意見でも結構ですので、最後に一言ずつお願いいたします。

赤嶺副委員長： あらためて、初めての方もいらっしゃいますので、ご紹介も兼ねてお話し

させていただきます。私は街クリーン株式会社の代表をしています赤嶺と申します。廃棄物のリサイクルを中心とした仕事をさせていただきながら、いくつかの会社も持っておりまして、その業種の連携というか、また、廃棄物処理業から当社の場合はスタートしているんですが、今、建設業とか解体工事業とか造園業とか、あとは農業の方にも進出しております。

廃棄物処理業をしていると、今はもう資源循環型社会ということでリサイクルをしていくんですけれども、そのリサイクルをする前の川上の部分ですね。例えば解体工事ですと、今は分別をして解体をしていかないといけないということとかですね。それを、では自社でやろうということで、その方がまたリサイクルもしやすくなるとかがあるんですね。

例えば造園業ですと、草木の伐採工事をしたりしますし、その草木を引き取って、また破碎をしておがくずに製造して農家さんへの還元、あとは牛舎の敷きわらだったり、そういったものにリサイクルをしますし、また、自社でも食品系の廃棄物とか、その他グリーストラップや豚糞、そういったものを引き取って、破碎チップ化されたおがくずと混ぜて堆肥化している。堆肥化されたものを、自社の農業法人もありますので、そこでまいて野菜をつくったり、そういった動きをしています。

廃棄物の処理業からの発展系でわれわれの企業は今グループ化しているんですけれども、非常にそこが奥が深くて、ほかの業種のことも勉強しながら今取り組んでいるところです。

こういったことをやっていくと、沖縄型の循環社会って何かなというふうに、沖縄のくくりだけですごく考えさせられる今機会をいただきながら、当社なりの、循環というよりも、沖縄の廃棄物問題を沖縄で解決するというのを一つのテーマに私は考えていて、廃棄物問題の解決というのは、循環型社会が一つの方法だったり、いくつかのリサイクルの方法に取り組んでいくということを今やっています。

今回のプラスチック問題というの、プラスチックだけにフォーカスしていますが、そのほか廃棄物の問題も一緒だと思っていますので、私なりの部分で事業してきた中で出てきた考え方というのを今後も皆さんにお伝えできればと思っています。

一つ、廃棄プラスチックのことだけの話をさせていただきますと、今沖縄県の方も、こちらの方でプラスチックをリサイクルして建設資材を製造されているような業者さんへのたぶんアンケートを採られているなど感じたところがあるんですけれど、私たちもその企業さまと一緒に連携していこうという動きもしています。

ただ、プラスチックも本当にさまざまな種類がありますので、種類に分けたかたちで建設資材をつくっていくといったことから取り組んでいって、その建設資材を建設会社が使っていく、利用していくというかたちをつくっていかないといけないと思うんですね。

そういった意味では、例えば県であれば公共工事の発注者側にはなってきますし、今でも実際にリサイクル品を優先的に仕様書等々には入れられて使われてはいるんですけれども、こういった処理する側、これがインプットで、次はアウトプットの部分がどうしても出てきますので、私は今廃棄物処理をする側の目線で話をさせていただきますと、もっとその後押しをやっていくようなかたちをこの提言書の中に入れていけるのかなと思っています。

清野委員：九州大学の清野です。私は「九州大学海つなぎ」というプロジェクトをやっていて、その地域の方とか、あと多世代とか、そういうことでいろいろつながりながら海を学ぶという海洋教育のプロジェクトをしています。

その中で、九州はすごくビーチクリーンというのが盛んなので、ただ子どもたちが参加するか、あるいは高校生だと動員されていたりするので、拾うだけじゃなくて調べていこうということで、調べ学習だとか、総合だとか、探求とか、そういうものを絡めながらやっているとところです。また、沖縄の方ともいろいろつながってきておりますので、ぜひそういうかたちで、少し地域的に離れているところと一緒に調査をやると面白いので、ぜひお願いいたします。

それから沖縄県内でいうと、私は国の泡瀬干潟の環境の関係の委員会とかをずっとやってきていて、そこは新しいフェーズに入って、人工島の中とか、周辺でビーチクリーンをするときに、では、どういうふうに関わっていくかとか、新たな地域づくりにどういうふうに関与させるかということが、つい先週の会議で出てきております。

それから、うるま市の干潟再生にも参加させていただいているんですけども、そこでも沖縄らしい循環型の生活をもう一回取り戻そうというものがあります。ですから県内でもいくつか心あるところのプロジェクトが始まっていますので、ぜひ県の方針とうまく連動していくと相乗効果が出るかなと思っております。

常盤委員：私は微生物によるプラスチックの分解について、50年ほど研究しております、その関連で生分解性プラスチックの開発にもずっと取り組んできました。3年前に沖縄で起業しまして、現在、海洋で生分解するプラスチックの開発に取り組んでおります。

沖縄のサンゴに囲まれたきれいな海での評価というのは非常にうまくいっていると思っています。最近、海洋生分解性プラスチックの評価方法についても提案しています。評価方法については、当社だけでなく、国の機関でもISO（国際標準化機構）への提案に向けて取り組まれています。沖縄の海は非常にきれいで、海洋生分解性プラスチックの開発にとっては非常に適した海だと思っております。

原田委員：私も今さまざまな社会科学、人文科学、あるいは自然科学の先生方も一緒に研究プロジェクトを新しくスタートさせまして、特に農地で発生するプラスチックごみ、これも意外と多いんですが、さらにマイクロプラスチック、農地でもマイクロプラスチック化してしまうんですけど、河川も含めて、目視では難しいようなごく微細なマイクロプラスチックをスマートフォンとかを使って簡単に中学生でも調査できるようなキットの開発を今行っています。7月にプレリリースできる予定ですので、ぜひまた沖縄県での環境教育にもご活用いただけたらなと思っています。

それと最後、この提言のところ、さっき言い忘れていたんですが、最後の6番に「制度の導入と活用」というのを設けていただいております。ふと読んでいて思ったんですけども、産業廃棄物税条例のことを挙げてくださってまして、これは非常に全国で多くの自治体でも導入されていて、効果も上がっている一つの制度かと思えます。

例えば先ほど浅利先生はドイツにご出張されたお話をされていましたが、ヨーロッパよりもっと進んでいて、イギリスなどでしたらプラスチック税というものを導入して、一定割合リサイクル品、リサイクル素材を使っていなかったら税が重くなるというような制度をつくって、もともと減らしていくということと合わせ技でやっていく必要があると思うので、またあらためて事務局にメールをお送りさせていただきますが。

②番に「ふるさと納税の活用」とあるんですが、県の規制というときには法律や条令で規制する仕方もありますけれど、経済的な手段もうまく使えば、うまく機能させられますので、そういったところもぜひまた議論できればなと思っています。一応本職は財政学ですので、またよろしく申し上げます。ありがとうございます。

久鍋委員： 私は沖縄県で出店をしたコンビニのセブン—イレブンの社長をさせてもらっています。

今日はいろんな意見があって、今日の部分で2点だけお願いをしたいのが、まず今たぶん皆さんがやろうとしているのは「参加をしてもらう」ということ。私は、時期というのは開始時期で十分いいと思います。みんなが始めようとする時期ですので、参加をしてもらって来年にはやってもらうことが当たり前ということの周知をしていけば、「沖縄らしさ」は大きく変わるんじゃないかなと。そのためには項目を大きく取るのではなくて、やりやすいものに絞って告知をしていくというやり方をぜひやっていただきたいというのが1点目。

2点目については、実は赤嶺さんがおっしゃっていたんですけども、やはり沖縄県の中でリサイクル産業が循環型をできないというのが最大の問題だと思います。周知をしてプラスチックを集めようが何をしようが、その後の処理ができないというのが。そこでの循環型、また、企業として経営ができる体質にしていくということが継続をしていくプラスチック問題への対応だと思いますので、項目は書かれていましたけれど、ぜひ次回そういった項目について多く議論ができればと思っております。よろしく願いいたします。

村上委員： 私が所属している日本消費生活アドバイザー・コンサルタント・相談員協会という団体はNACSという通称ですが、全国組織で2300名ほど会員が活動しております。その中でもサステナビリティへの関心は高まってきていまして、今は「脱炭素に向けて消費者は何ができるのか」という連続講座を行っていたり、エシカル消費の人材育成や教材開発に取り組んでおります。

今年度はプラスチックも何らかのかたちで扱っていきたいと思っていて、ぜひこの沖縄の動きも紹介しながら連携していけたらなと思っております。また、沖縄にも会員さんがいらっしゃいますし、この関連団体との連携のところで記載されている消費者センター沖縄でもメンバーの方が働いていらっしゃったりするので、募集の告知などにご協力していければと思っております。どうぞよろしく申し上げます。

伊藤オブザーバー： オブザーバー参加をさせていただきました、東京大学未来ビジョン研究センターから参りました伊藤と申します。オブザーバーで、しかも今回初めてということなので、皆さんの熱心な議論の方を今日は拝聴させていただきました。

簡単ではありますが自己紹介の方をさせていただきますと、われわれ未来ビジョン研究センターの方では、理系のグループもあるんですけども、私と、昨日帰ってしまったんですけども、今日は所用があつてどうしても参加できないんですが、教授の城山の方は、地域の社会課題としてのごみ問題を皆さんと一緒に考えていきたいと考えております。

その中で私どもとしては、非常に着目点として重要に考えておりますのが、やはり地域の皆さんの力を合わせていただくということが非常に重要なポイントなのかなと、常日頃、地域創生を考えるとときに考えております。横で連携を取りながら皆さんの力を合わせるというのは簡単なことではございませんで、それをどうやって実現させるかということですが、先ほど榎野さまの方からもご発言があつたかと思いますが、ぜひそれぞれにとっての便益というものを考えていけたらと思っております。

今、社会便益、ベネフィットという、社会にとっていいことというのはもう明白でして、きれいな海を沖縄の資産として有効活用していくというのは当然のことですけれども、沖縄の海をきれいにしていくということが県民の皆さんお一人お一人、それから沖縄を支えていく産業の皆さんお一人お一人にとってどのようによいくtoberっていくのかなということをぜひ皆さんと一緒に研究させていただければと思っております。本日はありがとうございました。

浅利委員長： ありがとうございます。

まずは少し発進に向けた素材づくりを先に先行して進めていただきつつ、次回に向けて議論したい点も挙げていただいておりますので、できる限り反映していただいた上で進めていきたいと思っておりますので、事務局の方もどうぞよろしく願いいたします。